

甘党提督と響ちゃん

パティ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「海を護る君たちの為に、今日も私は一番美味しいお菓子を用意して待ってるよ」

これは大本営にスカウトされた元洋菓子職人の新人提督（甘党）と、秘書艦響を中心とした鹿屋基地の戦いと甘いお菓子の物語である。

目次

プロローグ	1
着任	4
新しい仲間	7
秘書艦 響	11
初めての戦艦	15
期間限定海域	22
AL作戦／MI作戦	25

プロローグ

「眠れない……」

来たるべき最終海域攻略を明日に控え、今夜は早めに就寝せよ、と指示が出ているのに眠気が一向にやつてこない。神経が昂っているのか、それとも柄にもなく緊張しているのか。

『響ちゃんは緊張しないっぼい?』

「いつも通りやるだけだよ」

『さすが秘書艦は肝が据わっているっぼい!』

……

「夕立にあんなこと言ったのに、説得力無いな」

部屋に入る前に夕立と話した内容を思い出して自嘲気味に呟く。

ベッドから身体を起こし、コートを羽織つて部屋から出る。外は寒いけれど、少し頭を冷やした方がいいと思った。

消灯時間は過ぎているので、音を立てないよう気を付けて階段を上がり屋上へ出る。

3月とはいえ夜中の屋外は冷える。冷たい風を感じ、澄んだ空気を身体に取り入れた所で自分以外の姿に気が付いた。

「司令官、まだ起きていたの？」

「ん？ああ響か」

そこには鹿屋基地所属の提督、私たちの司令官がぼんやりと海を眺めていた。改二改装して名前が変わっても、司令官は変わらず響と呼んでいた。

「明日に備えて早く寝るように言っただよ？」

「なんだか目が冴えちゃって……。司令官こそ部下にそんなこと言ったのに自分は起きているなんて」

「明日の仕込みが終わって少し夜風に当たりたくくなってね。そうそう！明日のケーキはとっておきを用意したから楽しみにしててよ」

キラキラした笑顔でそんなことを話す司令官に私は苦笑してしまう。本当に甘いものに目がない人だ、今だって持っているカップの中はコーヒーじゃなくてココアだ。

司令官は元洋菓子職人で普段から艦娘用にお菓子を作っているが、大事な作戦前には特別気合の入った物を用意してくれる。当然それらのお菓子は出撃メンバーにしか振舞われず、特別なケーキを目当てに日夜鍛錬に勤しむ人もいるほどだ。

「昔は6人分でよかったのに、今は12人分いるもんね」

と連合艦隊での出撃が当たり前になった頃、司令官が笑いながら話していた。

司令官の作るお菓子は絶品で、そのお菓子を支えられてここまでやって来た。それはこの鹿屋基地にいるみんなが思っていることだろう。

そんな司令官と一緒にここまで戦ってきたのだ。

「ねえ司令官、眠くなるまで思い出話に付き合ってよ。大丈夫、作戦に支障がないようにするからさ」

「……しようがない、本当に少しだけだよ？ 終わったら速やかに寝ること」

「はい」

そんなやり取りを交わしながら私たちは話し始める。

それは4年前の7月。元洋菓子職人という異色の経歴を持つ青年が、鹿屋基地に着任した日までさかのぼる。

着任

「は、はじめまして！特型駆逐艦、電です。ど、どうかよろしくお願いします」

がらんとした執務室に上ずった声が響く。自分でも緊張しているのが伝わってくる声だ。

「はわわ…第一印象が大事なのに心臓がバクバクして落ち着かないのです…」

真つ赤になった顔を手で抑えながら深く深呼吸をする。

突如海から現れた謎の存在、深海棲艦。

人類と深海棲艦との戦いが始まって1年と少しが経過した頃、私は鹿児島県にある鹿屋基地の初期艦として配属が決まった。4大鎮守府でも無く、大本営のある中央からも遠い。そういった事情で配属先としてはあまりいい部類ではないらしい。でも仕方ない、戦いは得意ではないし事実適性テストの成績も悪かったのだ、文句は言えない。

それでも艦娘としてできることをしなければ。まずは司令官にちゃんと挨拶を、と思いい練習をしているが、やればやるほどドツボにハマっているようだ。

「はあ…こんな時叢雲ちゃんなら堂々としているのになあ…」

いつも堂々としていた同期の顔を思い浮かべ自然とため息が出てしまう。

これではいけないと頭を左右に振り、部屋をぐるりと見て改めて不思議に思う。

「やっぱり司令官さんの荷物これだけですよね？」

昨日宅配で司令官さんの荷物が送られてきたが、部屋の片隅には段ボールが片手で数えるほどしかない。その代わりキッチンには様々な荷物や器具が届いていた。

そんな事を考えていた時だった。

「あつ！来ちゃったのです…！」

窓の外、基地の入り口からこちらに向かつて歩いてくる男性を見つけた。白い制服を着ている。間違いない、あれが新しい司令官さんだ。

「と、とにかくお出迎えと挨拶なのです！」

急いで部屋を出て玄関へ向かう。心拍数が跳ね上がり、胸がギュツと苦しくなる。口の中が乾いてすぐに水が欲しいくらいだ。

「と、とにかく挨拶だけでもちやんとして、後のことは成り行きに任せるのです！」

半ばヤケになりながら玄関に到着した時には、司令官さんはすぐそこまで来ていた。

「…っ」

しかしいざ正面に立つと声が出ない。緊張し過ぎで何も言えず、司令官さんの顔も見られない。視線を逸らし俯いてしまったその時、

「あなたが電さん？」

と穏やかな声が聞こえてきた。

ハッと顔を上げると優しく微笑んだ男性がそこにいた。

「はじめまして、本日鹿屋基地に着任しました佐藤 和洋（かずひろ）と申します。どうぞよろしくお願い致します。」

被った帽子を取りながら、深々とお辞儀をする姿に呆気にとられてしまった。こういう場合は敬礼をする筈なのでは？と考えていると、

「あつ!!!、ごめんなさい！着帽時は敬礼するんですしたよね。すみません、まだ軍属になって日が浅いものですから…」

慌てて帽子を被り直し、恥ずかしそうに敬礼する司令官さん。その姿がなんだかおかしくて自然と肩の力が抜けていた。そんな司令官さんの顔を見ていたら、私は大きな声で挨拶をすることが出来た。

「はじめまして、司令官さん。電です、どうかよろしくお願いしますー！」

新しい仲間

「そ、それじゃあ司令官としての訓練はほとんど受けて無いのですか!？」

お互いに自己紹介をした後、一通り施設を案内して執務室に移動した時、私は素っ頓狂な声をあげていた。

「そうなんです。なんでも戦況が思わしくない上に、教育できる人員に限りがあるとかで、基本的な情報を説明された後、すぐに配属先に行くようにと…」

「そんな…」

確かに戦況がよくないのは教わっていたが、ここまでとは思わなかった。本当に大丈夫かと心配していると、

「そんな状況ですが、工廠担当の艦娘と、任務管理と作戦立案を補佐してくれる艦娘は予定通り配属されるので、その人達と協力しながらやっていきましょう。それにいきなり敵の中枢へ行け、なんて作戦は来ないでしょうから焦らず力を付けていきましょう」

司令官さんが穏やかに言う。きつと不安が顔に出ていたのだろう。でも私は、
「はい…。電も頑張ります。」

ぎこちなく答えることしか出来なかった。

そんなやり取りをしていると、執務室の扉をノックする音が聞こえた。司令官さんの「どうぞ」の声がした後、2人の女性が中に入ってきた。

「失礼します。提督、遅くなってしまい申し訳ありません。はじめまして、軽巡大淀と申します。大本営からの任務の管理と作戦立案の補佐をさせていただきます。そしてこちらには……」

「ども！ 工作艦明石です。建造・開発等々、工廠関係は私にお任せくださいね！」

敬礼をした2人がそれぞれ自己紹介をする。大淀さんはキリツとした真面目な表情。対して明石さんは笑顔で元気よくと、自己紹介にも個性が出るなど興味深く見えました。

「はじめまして、本日着任しました佐藤 和洋です。新米ですがよろしくお願いします」
司令官さんも変わらず、にこやかに挨拶をする。

「ふーん。なんか予想してたイメージと全然違ったね、大淀！」

「勝手なイメージをしていたのはあなただけよ、明石。私は必要ない先入観を持ちたくないもの」

「ちえー、大淀つてばお堅いんだから」

「そんなことより提督。このまま電さん1人では出撃も遠征もままなりません。そこで建造で戦力を増やすことを進言致します」

「おっ！いいじゃん大淀！早速私の出番って訳だね、腕が鳴るねえ」

「…明石はこの通りの艦娘ですが、工廠関連の腕だけは確かですからご安心ください」

「あー！大淀の意地悪！そんなこと言わなくてもいいのにー！」

大淀さんと明石さんは長い付き合いのようで、時折軽口を挿みながら話を展開していく。司令官さんはその様子をクスクスと笑いながら見ていた。

「分かりました。では早速工廠で新しい仲間の建造をしましょう。明石さん、よろしくお願いしますね」

「はい！お任せください！」

明石さんは元気に答え、準備があるからと先に工廠へ向かって行った。私たちも必要な書類を持って、揃って工廠へ向かうことになった。

・
・
・

工廠へ到着すると準備はあらかじめ終わっていた。資料を手に明石さんが尋ねる。

「それで資材の投入量はどうでしょうか？多ければ戦艦や空母の建造が可能ですが」

「大本営から提供された初期資材は多くありません。戦艦や空母は強力ですが、資材の消費も激しいです。まずは最低量の資材で駆逐艦や軽巡洋艦を揃え、艦隊の安定的な運営を目指すのが良いと思います」

大淀さんの助言に司令官さんは「なるほど」と頷く。私もその意見に賛成だ。私たち

艦娘は資材が無ければ海に出ることも、戦うことも出来ない。資材の確保は艦隊の行く末を決めると言っても過言ではない。

「そうですね。まずは最低限の量でやってみましょう。すぐに結果も見たいので、高速建造材の使用もお願いします」

「了解です！さあ艦隊初めての建造、行きますよー！」

資材が投入され、建造が始まる。私はドキドキしながらその様子を見守る。どんな艦娘が現れるだろうか、仲良くなれるだろうか、そんな事ばかり考えていた。

「おっ！この時間は駆逐艦で確定ですね」

明石さんが時間を確認して司令官さんに伝え、高速建造材を使用する。

そして、

「響だよ。その活躍ぶりから不死鳥の通り名もあるよ」

現れたのは暁型2番艦の響。薄い水色の長い髪がよく似合う女の子でした。

「ひ、響？響なのです！司令官さん！」

姉妹艦の建造に私は大はしやぎしてしまった。さっきまでのドキドキは無くなり、その場で飛び跳ねる勢いだった。

新しい仲間を加えた私たちの鹿屋基地での生活は、こうして始まったのです。

秘書艦 響

「失礼します。あれ、響だけなのです？司令官さんは？」

執務室に入ってきた電が尋ねる。

「ああ、司令官ならキッチンにいるよ。午前中の間に今日の分は作っておきたいんだつて」

「なるほど、そうでしたか。通りでさつきからいい香りがすると思ったのです。じゃあこの書類を司令官さんに渡しておいて欲しいのです」

「了解、その箱に入れておいて」

「ふふ。それにしても秘書艦が板についてきましたね」

「あんまり事務作業や書類作成は得意じゃないんだけどね」

「まあまあ、何かあれば電もお手伝いするのです。それじゃあまた後で」

笑いながらそう言い残して電が執務室から出ていく。

艦隊が稼働を始めてから一週間が経過した。仲間も駆逐艦を中心に少しずつ増えたと、海域の攻略もゆっくりとだが、着実に進んできている。

しかし最も驚いたのは、司令官の能力と軍属になった経緯だった。

司令官は軍に入るまでは、ごく普通のケーキ屋で仕事をしていたらしい。軍や艦娘とは関わりが無かったが、ある日司令官のケーキを買って食べたところ艦娘が戦意高揚、いわゆるキラキラ状態になった。

その事に注目した大本営は司令官のレシピを入手し、忠実に再現した。いや、しようとした。しかし、結果は失敗。何度挑戦してもキラキラ状態にはならず、司令官の手で作らなければ意味が無い事が証明された。

その後大本営は何を思ったのか、ケーキを作る人間がそのまま指揮をすればいいのではないか、という結論に至ったらしい。どういう意図なのか分からないが司令官も、「毎日納品に行くのも大変だし、住み込み出来るから出勤時間0分でいいかなと思って、まさか鹿屋に来るとは思ってたかったけど」

と笑って話していた。ちょっと理解出来ない…。

でも悪い人ではないし、司令官としての勉強もコツコツやっているみたいだし、何より美味しいお菓子が毎日食べられるのはとても嬉しい。ただ、

「どうして私を秘書艦にしたんだろう」

1週間前、私を含めた数人が建造された次の日には、私が秘書艦に指名されていた。もちろん電が補佐に付くことだが、あまりにも早い配置転換に驚いた。司令官に理由を聞いてみたが、明快な答えは聞けなかった。

そんなことを考えていたら時計から正午を告げる音が響く。書類を揃え、軽く伸びをししてから立ち上がり、

「さて、司令官の様子でも見に行ってみようか」

1人呟き、1階に特別に作られたキッチンへ向かった。

・
・
・

キッチンの中では司令官が洗い物をしていた。軽くノックをして声をかける。

「司令官お昼になったけど、一段落したかい？」

「ああ、響。うん、もう一通りの作業は終わったよ。書類任せちゃってごめんね、助かったよ」

「それはいいけど。それより今日は何にしたんだい？」

「今日はね、シュークリームにしてみたよ。学生時代から思い入れのあるお菓子でね」

「それって得意だったってこと？」

「ううん、逆。失敗ばかりでよく先生に怒られたよ。試験の課題もこれだったし、計量初めて間違えたのもこれだし。でもそのおかげで1番作ったのもシュークリームでね、だから思い入れのあるお菓子なんだ」

「へー、そうなんだ。じゃあ午後に美味しく頂くためにもまずはお昼にしようよ」

洗い物を済ませた司令官と一緒にキッチンを出て並んで歩く。今日は何を食べよう

か、そんなたわいもない話をしながら食堂へ向かった。

初めての戦艦

「みんな揃ったね。それじゃあ製油所地帯沿岸、通称1—3攻略の作戦会議を始めようか」

司令官が集まった顔を見ながら会議を開始する。今回の参加艦娘は秘書艦の私、響、補佐の電。それに大淀さんと明石さんだ。

会議の先陣を切ったのは大淀さん。

「現状、我が艦隊には戦艦がいません。1—3敵主力には戦艦ル級が待ち構えており、今のこちらの戦力では撃沈は難しいかと」

「確かにねー。夜戦ならチャンスはあるかもだけど、その前に大破に追い込まれるもんね。火力、装甲共に駆逐艦や軽巡でやりあうのは分が悪いよね…」

普段明るい明石さんも、多少テンション下がりがり気味で付け加える。

「あの…。それなら重巡の方に出てもらうのはどうなのでしょうか？先日加入した古鷹さんや摩耶さんがいますよね？」

電がおずおずとしながら発言をしたが、

「その2人は加入したてで、まだ練度に不安があるのよね。ぶつつけ本番するのは整備

の側からは避けてもらいたいものよ」

明石さんが困ったように話す。

うーんと考え込んでいると、

「じゃあ戦艦作ろうか」

突然司令官がそんなことを言い出した。

「遠征班の頑張りや、多少戦果を示したことで資材の備蓄には若干の余裕が出来ている。この辺りで戦艦の建造に挑戦してもいいんじゃないかな？」

「戦艦……」

明石さんが目をキラキラさせて呟く。完全にスイッチ入っちゃったな…。

「響、今の資材で戦艦建造は何回くらい出来そうかな？」

司令官に問われ、手元の資料をめくりながら私は答える。

「ギリギリ2回かな。それ以上は艦隊運営に支障が出るね。ただ、できることなら1回にしてもらいたいね」

「それに戦艦レシピを採用したとしても、確実に戦艦の建造に成功するわけではありません。複数回の建造は私も反対です」

大淀さんが眼鏡を上げながら補足をする。

「えー！頑張って戦艦造るから何回もやらせてよー！」

明石さんが駄々っ子のように騒ぎ始める。そこへ

「ダメよ」

と大淀さんの一言。ヤバイ、目がマジだ…。電も大淀さんの迫力に顔が引きつっている。

「まあまあ大淀さん。では一回だけ、戦艦建造に挑戦しましょう。明石さん、みんなが集めた大量の資材を預けます。よろしくお願いしますね」

大淀さんの迫力と司令官の言葉に明石さんも、

「は、はい…。ありがとうございます、が、頑張ります…」

と、納得するしかなかった。

・・・

工場はいつも以上に熱気に包まれていた。先に明石さんが伝えていたのだろう、妖精さんも張り切っている。初の戦艦建造の噂をどこで聞きつけたのか、興味のある艦娘も何人か来ている。

「では、早速始めちゃいますね！」

すっかり元気になった明石さんが建造を開始する。そして表示された建造時間は、4時間20分。

「提督！戦艦です！この時間は…」

「明石さん高速建造材の使用を許可します！」

「りよ、了解です！」

司令官の許可を受けて明石さんが高速建造材を使う。そして現れたのは、

「扶桑型超弩級戦艦、姉の扶桑です。妹の山城ともども、よろしくお願い致します」

黒髪で巨大な艦装を背負った、艦隊初の戦艦がそこに立っていた。

「提督、やりました！戦艦の建造に成功しました！たくさん褒めてください！」

「流石です、明石さん！本当によくやってくれました」

明石さんと司令官は大喜びで、その場で飛び上がりそうな勢いだった。

当の扶桑さんはキョトンとその様子を眺めていた。

「騒がしい艦隊でごめんね。はじめまして、ここの秘書艦を務めてる響です、よろしくね。で、あそこで飛び跳ねてるのがうちの司令官」

「え、ええ。よろしく願います、響さん」

少し戸惑っているけれど、落ち着いた物腰の柔らかそうな人。そんな風に考えていると、ひとしきり喜んだ司令官がやって来た。

「すみません、ちよつとテンション上がっちゃって…。はじめまして、ここの提督を務めている佐藤です。よろしく願います、扶桑さん。期待しています」

「は、はい…」

「じゃあ早速、摩耶達と演習に行ってもらおうか。響、編成を確認したいから一度執務室へ行くよう」

頷き扶桑さんに、「また後で」と声をかけて司令官と一緒に廊下へ出る。

「あ、あの提督……!」

廊下を少し歩いた所で扶桑さんに呼び止められる。

「提督は、本当に私を前線に出すおつもりですか?…私は不幸型とも欠陥戦艦とも呼ばれた存在です。艦隊にとってお荷物になります。私に期待して頂いても、それに応えることは出来ないんです……!」

震える声で扶桑さんは続ける。

「だから、私を艦隊から外してください」

確かに艦時代の扶桑さんの評価は良くなかった。そんなことを考えた時だった。

「それは出来ません」

司令官の強い声が扶桑さんの言葉を跳ね除けた。

「扶桑さんはうちの唯一の戦艦です。それをみすみす手放すことは出来ません。それに……」

司令官はまっすぐ扶桑さんの目を見て告げる。

「艦時代がどうだったか私は知りません。でも仮に欠陥戦艦だったとしたら、その評価

を覆してみませんか？」

「え……？」

驚いて目を丸くする扶桑さんに、少し微笑みながら司令官は続ける。

「つまらない昔のレツテルなんてここには必要ないんですよ。扶桑型はここまでやれるんだって、みんなに知らしめるんです。昔の評価を引きずっている人たちを見返してやるんです。そんな下克上を達成できたら、とつても楽しいと思うんです。」

「わ、私にそんなことできるでしょうか？」

「私も提督としては欠陥だらけです。でもみんなが助けってくれるから、なんとかやってこられました。みんな助けてくれます。扶桑さんも出来ます。だからその火力でみんなを護ってください」

司令官の言葉に扶桑さんはしばらく考え込んだが、

「わ、分かりました。私、頑張ってみます」

と少しだけやる気になってくれたようだった。

その後、演習を重ねた我が艦隊は1―3の攻略に成功した。扶桑さんは高い火力で次々と敵を撃沈していったけど、敵戦艦の攻撃で中破してしまった。でもその後ろにいた摩耶さんと古鷹さんが無傷で夜戦に突入、見事に敵戦艦の撃沈に成功した。扶桑さん

は、

「やっぱり防御力が欲しいですね…」

と自虐的に話していたけど、少しだけ自信が持てたみたいだ。

そうそうこれは余談だけど、その海域で出会ったのは妹の山城さんだったんだ。あつという間に扶桑姉妹を揃えた司令官は、実は運がいいのかもしれないね。

期間限定海域

「期間限定海域？」

鎮守府周辺海域の制海権を取り戻した頃、大本営から艦隊に指令が届いた。それを聞いた司令官が怪訝そうな面持ちをしている。

「はい。深海棲艦は周期的に集まり、大規模な侵攻を仕掛けてきます。それを察知し、防衛・反攻作戦を実行するのが期間限定海域です。通常の海域と異なり、補給線を保つ事が困難なので作戦期間を過ぎると、行けなくなるのが特徴です」

「そんな作戦が…」

大淀さんの説明を聞いて司令官はポツリと漏らす。ケーキの仕上げ作業に使っていたパレットナイフを置いて司令官は改めて大淀さんに問いかける。

「そんな話がここに來るって事はうちにもその作戦に参加しろ、ってことなのかな？」

「いえ、それが少し妙な事がありました…」

大淀さんが少し困ったような顔で2枚の紙を差し出す。

「1枚目は大本営からのいつもの指令書です。こちらには必ず参戦せよ、とあります。しかし2枚目は横須賀の中将からプライベートな回線で送られてきました。そこには

本作戦には参加しなくてよい、と書かれていました。…提督なにかご存じないでしょうか？」

「横須賀の中将…」

司令官は少し考え込んだ後、

「おそらくこちらの事を心配しているんだと思います。横須賀の中将殿は私の提督着任の経緯も知っています。指揮経験の少ない者が限定海域に行くことに反対しているだと思えます。でも…」

司令官は申し訳なさそうに続ける。

「大本営からの指令を無視する訳にはいきません。中将殿のご厚意はありがたいですが、限定海域には出撃しないといけないでしょう。大淀さん、早速今回の作戦の情報をまとめてください」

「了解しました。すぐに取り掛かります」

指示を受けた大淀さんが足早にキッチンから出ていく。

「響」

その姿を見送ってすぐ、そばにいた私に声をかける。

「あの人があんなメッセージを伝えて来るくらいだ、この限定海域ってのはヤバいのかもしれない」

「え？それってどういう…？」

「いや、思い過ぎしならいいんだけど。…軍の内部でなにかあるのかもしれない」

いつも穏やかな司令官の面影は無く、強張った顔で遠くを見ていた。初めて見たその表情に一瞬たじろいしてしまう。それに上官の事をあの人なんて、普段の司令官は言わなはず。

そんな司令官の顔を見て、私は司令官の事をまだまだ知らないんだ、と思ってしまう。司令官の事をもっと知りたいと思ってしまう。

司令官は今何を考えているのだろう、それを聞こうとした瞬間、
「あー！！！！生クリーム溶けちゃう！せつかく今日は自信作のイチゴゴムのシヨートケーキなのにー！！」

さつきまでの表情はどこへ行ったのか。司令官は大騒ぎでケーキを持って冷蔵庫へ向かう。

問いかける機会を失って私は言いかけた言葉を飲み込む。これからいろいろ知る時間も、聞く時間もあるだろう。そのタイミングでも遅くない。私は冷蔵庫の前で軽く凹んでいる司令官を励ますために、足を踏み出した。

こうして艦隊は初めて期間限定海域に挑むことになる。

作戦名は【AL作戦／MI作戦】

AL作戦／MI作戦

「なんだ……この戦力は……」

期間限定海域、北方AL海域の資料を見て、司令官が絶句する。無理もない、今まで私たちが戦っていた深海棲艦とは戦力が段違いだ。

司令官が限定海域に参戦を表明してすぐに、大本営から作戦概要と予想される深海棲艦の戦力データが送られてきた。しかしそこに書かれていたのは、強大な敵戦力だった。

さらに不可解だったのは、こちら側の作戦手順だった。

まず、鹿屋やそれと同時期に立ち上げた艦隊が先陣を切り、その後有力な艦隊が続くというものだった。先鋒を任せられたと言えば聞こえはいいが、これは……

「人柱になってこい、ってことなのかな」

司令官が険しい顔をして呟く。考えたくは無かったがその考えはおそらく当たっていると思う。

軍属である以上、上の命令は絶対。戦争には犠牲が付き物なものも理解している。しかし司令官は私たちが傷つくのを極端に嫌がる節がある。本当に優しい人だ、司令官に向

かないほどに。

「司令官……」

なんと声をかければいいのか分からず、呼びかけるだけになってしまふ。そこへ、

「提督、通信です。その……横須賀の中将からです」

大淀さんが声をかける。

「……」

司令官は無言のまま画面を向き、中将の通信に備える。

「やあ、久しぶりだね」

ほどなくして画面に穏やかなそうな老男性の姿が映し出され、司令官に声をかける。

「はい、着任前にお会いして以来ですね」

穏やかな中将とは正反対に、司令官は強張った顔を崩さない。緊張しているのかと

思ったがどうやら違うようだ。

「そんな顔をしないでくれ。あいつのことは……」

「中将殿、お話は何でしょうか？ わざわざ通信をされるくらいですから、なにか御有りののでしょうか？」

中将の言葉を遮るように司令官が言葉を投げる。その姿はいつもの司令官とはかけ離れていた。

「ふむ……。そうだな。用件とは今回の限定海域の事だ。指令書は確認したのだろうか?」

「はい、たった今作戦会議の最中でした」

「ならちようどよかった。指令書にあるように今回の作戦は難易度が高い。新設の艦隊には荷が重いだらう。それに君も気付いただらう?」

「……」

「北方AL海域の深海棲艦は強大だ。しかしその奥の海域には強力な敵は確認されていない。そこで、ある者が新設の艦隊や艦娘を犠牲に、AL海域の突破を狙う作戦の立案をした。反対意見もあったのだが、大本営もその作戦に最終的に賛成してな」

にわかには信じられない言葉に執務室がざわつきだす。

軍の一部とはいえ、そんな考えがあるとは。司令官は黙ったまま拳をギュツと握りしめている。

「中将殿。その作戦の立案をしたのは、どなたですか?」

司令官の低い声が部屋に響き渡る。

中将はしばらく黙っていたが、観念したように

「呉の提督だよ。君もよく知っている彼だ」

「あいつが……!」

「言っておくが直接抗議しようと思わないでくれよ。これは極秘事項だ。君たちもこの

事は他言しないように。」

中将が私たち艦娘に口止めをする。その言葉に私たちは互いに顔を見合わせ頷く。

「重ねて言うがこの海域から手を引きなさい。艦娘の轟沈は君の本意ではないだろう。大本営には私が手を回しておく。優秀な提督は引き際を間違えないものだよ。なにかあればまた連絡してくれ」

「・・・分かりました。ご配慮感謝いたします。失礼します」

通信が終わり司令官は大きく息を吐く。疲れた顔でこちらを振り向き、

「みんな、聞いた通りだ。うちは今回の限定海域の攻略から手を引くよ。各自ひとまずは待機していてくれ」

と、力なく私たちに告げた。

それを聞いたみんなが各々執務室から出ていく。ちらりと司令官の様子を伺うと、怒りと悔しさが混ざったような顔をしている。

呉の提督との関係。横須賀の中将の言いかけたこと。司令官の様子。分からない事だらけで胸の中がモヤモヤする。

「これからどうなるんだろう」

窓の外を眺めながら呟く。

こうして鹿屋基地最初の限定海域攻略は出撃なしという結果に終わった。順調に艦

隊を運営していた司令官が、初めて立ち止まった瞬間だった。